



5\_午前1時過ぎ。介添えを受けながらひしゃくで水をくむ千葉悠史君。「重かったけれど、がんばってくみました」と笑顔を見せた／6\_午前2時。奈良坂峠で小休止する一行。まだ3<sup>キロ</sup>。道のりは長い／7、8\_午前3～4時。凍える体を温めたのは、甘酒、玉こんにゃく、そして地元協力者の励ましの言葉だった



1\_松川市民センターで行われた出発式。奏者が注意事項を説明した／2、3\_「御使者到着の儀」。「延命そば」を食べ、道中の安全を願う／4\_吐く息が白い。かがり火で暖を取る



9\_午前7時。初日の出を背に受けながら、黙々と行進する／10\_中尊寺本坊前で若水の到着を通告。本坊玄関の式台で「若水進上の儀」を行い金色堂に若水を献上した／11\_磐井清水若水送り実行委員会の安東正利実行委員長は「これからも伝統を引き継ぎたい」と決意を述べた

当日は、雪こそ降らなかったものの、気温は氷点下になった。寒さに震える一行は、地元の協力者たちから甘酒などでもてなされた。心と体を温めた一行は、一度も若水が入ったおけを地面につけることなく、午前7時過ぎ、無事中尊寺に到着。今年一年の幸せを願う「若水進上の儀」で金色堂へ若水を献上した。

安東正利実行委員長は「地元の人たちの協力のおかげで四半世紀の節目を迎えることができた」と喜び、多くの人が平穏で幸せな一年を送ってほしいと願った。

「六根清浄、御山繁昌」。静かな里山に掛け声が響く。六根とは眼・鼻・耳・舌・肌・心のこと。清浄はその欲望を断ち切って清らになることを指す。御山繁昌は修行のために山を目指して進むときの唱え言葉だ。



「若水送り」は平泉藤原文化の時代、藤原秀衡公が元日の朝に、里人に磐井清水の若水をくませ、手繰りで平泉柳之御所に届けさせたという故事に基づき再現したもの。古式さながらの白装束をまとった一行が、東山町から平泉町中尊寺までの約17<sup>キロ</sup>の道のりを、若水桶を地につけることなく歩いて若水を届けた。

# Pick Up 「磐井清水若水送り」

## 奈良坂峠を越えて

東山町の「第25回磐井清水若水送り」(同実行委員会主催)は元旦に行われ、地元の有志たちが検笠と白装束を身にまとい、行列を組んで平泉町の中尊寺まで若水を届けた。

若水とは、元日の早朝にくむ水のこと。藤原秀衡公が磐井清水の若水で一年の邪気を除いたと伝えられてきた。

1993年、約800年ぶりに地元有志たちによって再現されて以来、新年の幕開け行事として定着している。

年が明けた午前1時すぎ、参加者220人が東山町松川の磐井清水に集合した。磐井清水番所守役宅前庭で御使者と大先達(6つ)と父親の真哉さん(43)が、厳かな雰囲気の中で若水をつくむ「若水汲みの儀」を行った。

星空の下、準備を整えた一行は、ちようちんの明かりを頼りに約17<sup>キロ</sup>の道のりを進み始めた。